

大阪府感染症発生動向調査週報（速報）

2019年 第21週（5月20日～5月26日）

今週のコメント

～手足口病～ 手洗いの励行と排せつ物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 増加続く」

第21週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は3,417例であり、前週比14.2%増であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、伝染性紅斑、咽頭結膜熱の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.91、3.92、3.03、0.76、0.76であった。

感染性胃腸炎は前週比3%増の1,362例で、大阪市北部11.00、南河内10.50、豊能8.27、北河内8.04、中河内7.85である。

手足口病は前週比54%増の772例で、南河内10.06、泉州5.05、堺市5.00、北河内4.67、中河内4.55であった。南河内、泉州、堺市は警報レベル開始基準値5以上である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比2%減の596例で、南河内5.56、大阪市南部4.33、北河内3.96、中河内3.50である。

伝染性紅斑は前週比11%減の150例で、北河内1.52、泉州1.05、中河内0.95であった。

咽頭結膜熱は前週比43%増の149例で、中河内1.20、堺市1.11、北河内1.04、南河内1.00である。

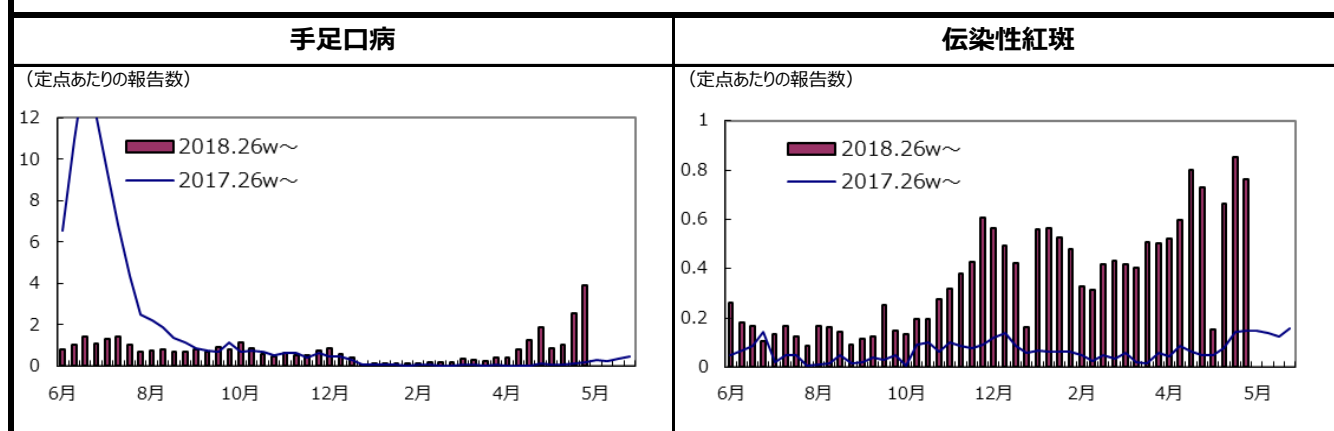


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2019年 第21週5月20日～5月26日）

第21週の順位	第20週の順位	感染症	2019年 第21週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第21週の 定点あたり 報告数	2019年第21週の 年齢別 患者発生数 最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	6.91	3%増	9.36	1歳_17%
2	3	手足口病	3.92	54%増	0.19	1歳_46%
3	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.03	2%減	3.11	4歳_16%
4	4	伝染性紅斑	0.76	11%減	0.15	5歳_19%
5	5	咽頭結膜熱	0.76	43%増	1.02	1歳_49%

第21週のコメント

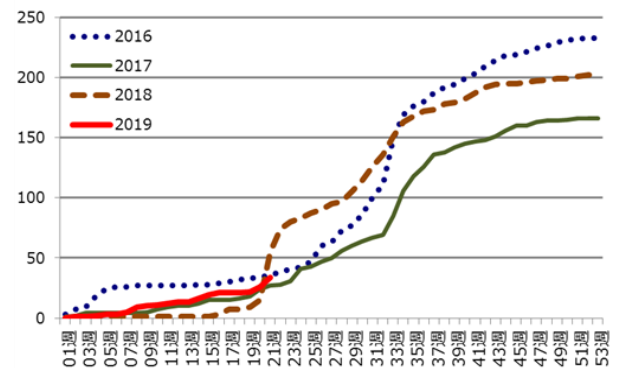
～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期において、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる(出血性大腸炎)。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。

(累積報告数)



[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)

[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表 2. 大阪府全数報告数 (2019年 第21週5月20日～5月26日)

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	府内								報告数	府内累積	
		豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市			
3 類感染症												
腸管出血性大腸菌感染症	8		1	3					1	3	34	
腸チフス	1				1						3	
4 類感染症												
E 型肝炎	1		1								3	
マラリア (熱帯熱)	1									1	2	
レジオネラ症 (肺炎型)	1									1	26	
5 類感染症												
アメーバ赤痢	3					1				2	25	
ウイルス性肝炎	1			1							7	
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	3		1		1		1				65	
急性脳炎	1			1							11	
後天性免疫不全症候群	2									2	50	
侵襲性肺炎球菌感染症	6		1	1			2			2	141	
梅毒	11	1						1		9	425	
百日咳	12	3		3	2	1	1	1	1	1	383	
麻疹	1		1								142	
結核 (2019年3月分)	結核 新登録患者数：153名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 53名) (府内累積報告数 425名、内 肺・喀痰塗抹陽性 164名)											

(2019年5月28日 集計分)